

第4回 球磨川下流域環境デザイン検討委員会 議事概要

日時：平成25年10月11日（金）14:00～17:00

場所：八代厚生会館 大会議室

■議事次第

1. 開会
2. 事務局からの説明
 - ・第3回委員会の議事要旨について
3. 議事
 - ・球磨川下流域の環境再生のあり方について
 - ・遙拝堰下流の瀬の再生に向けた河床デザイン検討について
 - ・河口域・汽水域の干潟・ヨシ原の再生のデザイン検討について
 - ・萩原堤防のデザイン検討について
 - ・今後のスケジュールについて
4. 閉会

■議事要旨

①球磨川下流域の環境再生のあり方について

委) 目標としてはすごくいいことをやっていて、生き物の専門家としては、すごく生物多様性に貢献できるいい仕事になるのではないかと期待している。

委) 沖のほうに中州ができて、その中州の上にヨシが生える場所があってもいいと思うので、将来を見据えて河川区域外（河口域）もターゲットとして、八代海を管轄する行政機関と調整して頂ければ期待が持てる。

委) 前川、南川の合流した河口域付近は、ヨシ原が昔あったところで、現在漁場としては何もとれないので、ヨシ原になってもらえばと期待している。

②遙拝堰下流の瀬の再生に向けた河床デザイン検討について

委) 旧遙拝堰の形状（カーブ）によって水の流れが圧倒的に違ってくるので、形状についてはよく検討すること。

委) 旧遙拝堰の形状がカーブになっていることで、瀬の面積が絶対大きくなる方向になるので、デザイン上は非常に重要である。

遙拝堰築造時に清正が何を考えたかということをよく考えて検討を進めること。

委) どれくらいの大きさの石を清正が使っていたかといった点も整理すること。

委) 産卵場が常に維持されていることがかなり重要となってくる。

委) たくさんの鮎が球磨川鮎ストーンについてコケを食べることになると思うが、今世界的に問題になっているウナギ等にも効果があるように、時々すき間があくような工夫も検討すること。

委) アユ以外の対象魚種について、ウナギ、トウヨシノボリ程度にして、瀬の回復が明らかになるモクズガニも対象種とすること。

委) 遙拝堰下流にこのような瀬をつくっていただいて産卵場を設けていただきたいというのが私たちの一番の願いである。モクズガニも球磨川の大変貴重な一つの資源である。

委) 洪水の時に河床材料が流れないようにするための下流のとめの必要性について検討すること。

委) 河川技術により詳細な構造を模索というのは、砂利がとどまれるのかをポイントとして考える必要がある。

委) レジャー的な利用だけではなく、環境教育的な場として、子供たちに向けた教育の場となるような工夫が必要である。

委) 左岸側の高水敷とあわせてちょっとランドスケープを考えられると最高に良い。

委) 遙拝堰下流左岸の護岸の線形がとても悪いので、構造について水理検討を実施すること。

委) 歴史と自然環境を両方勉強できるような仕掛けがあった方が良い。特に歴史性を踏まえ、どういう形でここを使っていたのか分かるようにすること。

委) 町の真ん中で尺アユがとれると言うことになると画期的なことである。

委) 八の字が分かるようなビューポイントを取り入れた周遊コースの整理も必要である。

委) 基本方針の6項目は一応皆さんの合意を得たということにさせて頂きたい。

③河口域・汽水域の干潟・ヨシ原の再生のデザイン検討について

委) ある程度干潟の状態として定常的にできているような段階なので、プラスアルファとして、可能な範囲で潮だまりのようなものができるようにしてなぎさ線を形づくり、もっと生物の多様性が深まる。

委) 子供たちを連れて行って環境学習をさせるときに、ある程度の動線等があれば環境学習に使える。

委) 干潟の中に礫がずっと連なって伸びている箇所があり、それだけの構造があるだけで、手前側と奥側で干潟を構成する材料が泥か砂かの違いがあり、生き物が全く違う。

委) 全体的に、水際が全部同じような単調なヨシ原の構造になる可能性も含んでいるので、干潟・ヨシ原の検討については、個々を精査する必要がある。

委) 干潟、河口域を見るときは、1つは平面図上でとどまる砂の状態が変わるので複雑さというものが必要である。

横断方向でとったときは、干潟は干出するので、干出時間に応じて生き物が変わってくる。

委) 自然再生を行った結果、生き物が減るといった可能性もはらんでいるということも考えておく必要がある。

委) 事務所の調査地点の生き物のデータ、九大の調査データ等を基に、生き物分布マップ等を作成し、生き物分布マップを確認しながら実施内容を慎重に行う必要がある。

委) 土砂を置くときも、どういう粒径のものをどういうふうに置けばどういう生き物が入ってくるのか。波と流れの関係で水辺(横断方向)の勾配というのは決まるので、どういう勾配にするのであればどれぐらいの材料が必要だとか。等の検討が必要である。

委) 干潟・ヨシ原の再生はもうちょっと詳細な検討が必要である。河口域では何がどこで産卵しているのかも非常に微妙なので、ちょっとずつ実施しながら行うのが良いと考える。いっぺんにやるのは心配である。

委) 今の計画では情報が少なすぎる。専門家によるワーキンググループを作って、もっと詳細な検討を行う必要がある。委員会だけでは扱いきれない事案である。

委) 泥干潟は、ゴカイ等底生動物の量が非常に多く、ベースで海の生態系を支えているので、ヨシ原は当然重要である。しかし、何をつぶして何をつくるということのプラス・マイナスをきっちり考えて進めるべきである。

委) 深いところに入れるというのは別に構わないと思うが、浅いところを埋めるという作戦が本当にいいのかどうかということを少し考える必要がある。

過去から現在に至るまでにどういう環境がなくなっているのかといった整理も必要である。

委) すべての対策箇所において人の導線は余りにしなくて良い。全体としてバランスを検討すること。

④萩原堤防のデザイン検討について

※検討状況の報告のみ

⑤今後のスケジュールについて

・ 次回の委員会は、12月に開催したい。